昭和二十八年十二月十日　初版印刷
昭和二十八年十二月十五日　初版發行

昭和文學全集26
吉川英治集

著作者　吉川英治
發行者　角川源義
印刷者　小田茂作
東京都品川區大井寺下町一四三〇

發行所
東京都千代田區富士見町二ノ七
角川書店
振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙　本州製紙株式會社
クロース　日本クロス工業株式會社
整版所　曉印刷株式會社
印刷所　東日本印刷株式會社
製本所　鈴木製本所

Printed in Japan

吉川英治集

昭和文學全集

角川書店版

目次

卷頭寫眞　七
筆蹟　二八
親鸞（全篇）
亂國篇　七一
紅玉篇　九八
登岳篇　一四八
去來篇　一八五
女人篇　二〇六
大盜篇　二三八
戀愛篇　二五四
同車篇　二九三
法敵篇　三三二
惡人篇　三九三
氷雪篇
田歌篇
隨筆　四三三
蓮如をおもふ　四三六
蓮如・洗馬
解說　四三九
年譜　四四〇

井伏鱒二

吉川英治集

つゆのなま

どうこうんでも

つゆのさま

英治

親鸞 上卷

亂國篇

第一の聲

一

朱雀の辻に、鈴を鳴らして、今朝から、喚いてゐる男があつた。

蜂にでもさされたのか、陽にやけた顏が、腐つた柘榴みたいに凸凹にゆがんでゐる。大きな鼻と、强情らしい唇を持ち、栗のイガみたいに、蓬々と伸びた坊主頭には、白い埃がたかつてゐた。

年ごろは、そんな風なので、見當がつかない。三十とも見えるし、四十かとも思はれる。身は、やぶれ衣に、繩の帶一つ。そして、沓よりは丈夫らしい素裸足で、ぬつと、大地から生えてゐるといふかたちである。

りいん！ りいん！

振り鳴らす鈴の音も、凡な力ではないのだつだ。

群衆は、取りまいて、

『何ぢや』

『どこの山法師かよ』

と囁き合つた。

殘暑の往來を、牛車が、埃をたてゝ軋る。貴人の輿がとほつて行く。

また、淸盛入道の飛耳張目——六波羅童と呼んで市人に恐れられてゐる赤い直垂を着た十四、五歲の少年等が、なにか、平相國の惡口でも演じてゐるのではないかと、こましやくれた眼を、きよろ〳〵させ、手に鞭を持つて、群の蔭からのぞいてゐる。

だが、男は、憚らない大聲で、自分のシャがれ聲に熱し切ると、我れを忘れたやうに、右手の鈴を、宙にあげて、

『淸聽つ、淸聽つ——』

と呶鳴つた。

『——沙彌文覺、敬つて、路傍の大衆に申す。それ、今世の相を見るに、雲上の月は、絕えまなく政權の爭奪と、逸樂の妖雲に戲むれ下天の草々は、野望の武士の弓矢をつゝむ。法城は呪詛の炎に燒かれざるはなく、百姓、商人、工匠たちの凡下は、住むべき家にも惑ひ、飢寒に泣く。——まづ、さうした世の中ぢや。——さうした世に生きる人間どもは、必然、功利に溺れ、猜疑深く、骨肉相食み、自己を省みず。利を獲れば身をほろぼし、貧に落つれば、人のみを呪ふ。富者も餓鬼！ 貧者も餓鬼！ そして、滔々と、この人の世を濁流にする——』

額に汗をして、そこまで、一息に云つた。

そして、

りいん

とさらに、鈴を振りかけると、

『乞食法師、待てつ』

誰か、呶鳴つた。

赤い直垂が、人垣を掻きわけて、前へ出て來た。

（六波羅小僧）

人々は、眼と眼で、さゝやき合つた。不安な顏をして、法師の鈴と、少年の鞭とを、見較べた。

法師は、傲然と、

『何かつ』

と、云つた。

平家の廳の威光をかさに着て、いかにも、小生意氣らしい町隱密の少年は、鞭で、大地をたゝきながら、

『おのれは今、——富者も餓鬼、——貧者も餓鬼、——そして、雲上は政權の爭奪と、逸樂の妖雲に蔽はれてゐると』

『はゝゝ……人の話は、仕舞ひまで聞け、それは、昨日の源氏の世を云うたのだ。……これから、今日のことを云ふ。だまつて、そこにゐて、聞いて居れ！』

鈴を、ふところに入れて、その懷中から、文覺は、何やら、紙屋紙に書いた一通の反古を取り出した。

二

『これは、勸進の狀』

文覺は、群衆へ云つて、それから、おもむろに書付をひろげだした。

眼の隅から、刎き飛ばされたやうに、六波羅童は、手もちぶたさに、人混みの中へ、引つこんでしまふ。

（さまを見ろ）

と云ふやうに、人々は、赤い直垂の尻を、眼で嗤つた。

文覺は、勸進の文をひろげ、胸をのばして、さてまた、大聲を揚げ直した。

『――今、云つたは、昨日のこと。さても明日の世はまた、冥々としてわからない。今日が、平和と云うたとて、生死流轉、三界苦海、色に、酒に、金に、跳猿し迷ひから醒めぬものは、やがて、思ひ知る時があらうといふもの。白拍子の、祇王ですらも歌うたではないか――

萌え出るも
枯るゝも同じ
野邊の草
いづれか
秋にあはで果つべき

心し給へ、大衆。いづれか秋にあはで果つべきぢや。こゝに、不肖文覺、いさゝか思ひをいたし、かくは路傍に立つて、われ等の同血に告ぐる所以。ねがはくは、貴賤道俗の助成によつて、高雄山の靈地に、一院を建立し二世安樂の勤行を成就させ給へ』

と、眸をあげた。

燃えるやうな眸である。人間同志の今の不安を見過し得ない憂世の血が、その底を流れてゐる。

咳一咳して、

『依而、勸進の狀』

と、手にひろげてゐた文を高々と讀みはじめた。

それ惟みれば
眞如廣大なり
法性隨妄の雲
あつく覆つて
十二因緣の峯に蠶きしより
この以降
本有心蓮の月のひかり
幽かにして
まだ、三毒四慢の太虛に
あらはれず
悲しいかな
佛日はやく沒して
生死流轉の巷冥々たり
たゞ色に耽り、酒にふける
いたづらに人を謗し
また世を毒す
豈、閻羅獄卒の責を免れむや
こゝに稀々、文覺
俗に拂ひ法衣を飾ると雖も
惡行なほ心に蔓り
善苗、耳に逆ふ
いたましいかな
再び三途の火坑に回り
四生の苦輪を廻らむことを
故に、我
無常の觀門に涙し
上下の眞俗をすゝめて
菩提の悲願に結緣の爲
一の靈場を建てむとなり、
それ、高雄は山高うして
鷲峯山の梢に表し……

聲かぎり讀んでゆくうち、汗はだく〳〵と彼の赤黑い顏に筋を描いてゐるのだつた。群衆は一人去り、二人去つて、誰も、懸命な彼の聲に、衝たれてゐる者はなかつた。

（なんぢや、また勸進か）

大衆は、錢乞ひに、懲りてゐる。惜氣なく、彼を殘して、散つてしまふ。

たゞ一人、立ち殘つて、

『おい、盛遠殿』

と呼びかけた旅商人がある。

三

『盛遠殿』

旅商人はまた、辻の柳樹の蔭から聲をかけて、
『もう誰も、お身の周りに聞いてゐる者はないぞ。――盛遠殿』
文覺は、はつと、勸進の文から顏を離して、いつのまにか、犬も居ない邊りの空地に、舌うちをした。
そして、腹だたしげに、
『やんぬるかな！』
つぶやいて、勸進の文をぐる〳〵と卷き、ふところに突つ込んで、歩みかけた。
すると、日除笠で顏を縛つた旅人は、ついと、彼のそばへ寄つて來て、文覺の肩をたゝいた。
文覺は、じろりと眼を向けて、
『おう。堀井彌太か』
初めて、驚いたらしい顏をして手をのばした。
彌太と呼ばれた旅の男は、なつかしげに、握り合つた手を、なぜか急に離して、
（叱つ……）
と、眼じらせをしながら、路傍へわかれた。
さつきの赤直垂の小僧が、ちんと、手洟をかみながら、二人のあひだを、威張つて通つて行つた、そして、小馬鹿にしたやうな眼を振向けて、へゝラ笑ひを投げた。
旅商人は、その眼へ、わざと見せるやうに、ふところ紙を出して、錢をつゝんでゐた。そして、文覺の手へ、
『御寄進――』
と云つて、渡した。
『や』
文覺は、眞面目に受け取つて、押しいただいた。
『一紙半錢の御奉加も、今の文覺には、かたじけない。路傍にさけんでも、人は、耳をかさず、院の御所へ、合力をとて願ひに參れば、犬でも、來たかのやうに、抓み出される……』
旅商人の堀井彌太は、先へ、足を早めながら、
『磧へ』
と、顎をしやくつて、見せた。
頷きながら、文覺は、てく〳〵と後から尾いてゆく。牛の糞と、白い土が、ぽく〳〵と乾いて、足の裏を焦くやうな、京の大路であつた。
だが、加茂の堤に出ると、咸陽宮の唐畫にでもありさうな柳樹の並木に、清冽な水がながめられて、冷りと、顏へ、濡れ紙のやうな風があたる。
『こゝらでよからう』
二人は、堤に坐つた。汗くさい文覺の破れ衣に、女郎花の黃いろい穗がしなだれる。
『しばらくだなあ』
彌太が云ふと、
『無事か』
と、文覺も云ふ。
『いや、俗身は其許のやうに、なか〳〵無事ではない』
『俺とても、同じことだ』
から〳〵と、文覺は、笑つて、
『聞かぬか、近頃の噂を』
『今日、京都へついたばかり。何のうはさも聞いてをらぬ』
『さうか。……實は、神護建立の勸進のため、院の御所へ踏み入つて、折から、琵琶や朗詠に酒宴してゐた大臣どもに、下々の困苦の呪ひ、迷路の呻きなど、世の實相を、一席講じて、この呆痴輩と一喝した所、武者所の侍どもに、襟がみ取つて拋り出され、それ、その時の傷や瘤が、まだこの頭から消えてをるまいが……』
イガ栗の頭を撫でて、笑ひながら示すのだつた。顏の凸凹に腫れ上つてゐるのも、その時の棒傷であつたらしい。

四

文覺は、まだ十九の頃に、若い髻を切つて、大峰、葛城、粉川、戸隱、羽黑、そしてまた那智の千日籠りと、諸山の荒行を踏んできた、その昔の遠藤武者盛遠が成れの果てゞあつた。
どこかに、面影がある。
いや、ありすぎる――
と旅商人の堀井彌太は、さう思ひながら、彼の磊落な話しぶりに、誘ひこまれて、腹をかゝへた。

『はゝゝゝ。――道理で、疱瘡神のやうに、顔も頭も、腫れてをる』
『まだ、いたい』
『懲りたがよい』
『何の、懲りる男ぢやない』
『法衣はきても、相かはらずの武者魂、それでこそ、生きてゐる人間らしい』
『生れ變つて來ぬうちは、その魂といふやつ、氷の上に坐らせても、龍に打たせても、容易くは、變らぬものぢやて』
『わけて弓矢にきたへられた根性は。――したが一別以來、お互ひに、變らぬ身こそ、まづめでたい』
『いや、おぬしの身裝は、ひどう變つてをるぞよ。初めは、誰かと見違へた』
『これは、砂金賣の旅商人、よも、侍と見るものはあるまい』
『陸奥守藤原秀衡が身うち、堀井彌太ともある者が、いつの間に、落魄れて、砂金商人にはなりつるか、やはりおぬしも、無常の木々の葉――。梢から、何かの風に、誘はれたな』
『何の』
と、彌太は手を振つた。
『これは、世をしのぶ、假の姿ぢや』
『さては、京都へ、密使にでも來たといふ筋あひか』
『ま、そんなもの』
『俺の身上ばかり糺さいで、その後のおぬしの消息、さ、聞かう。――それとも、舊友文覺にも、洩らせぬほどの大事を』
『ちと、言ひ難い』
『では聞くまい』
『怒つたか』
『ム、怒つた』
文覺は、わざと、むつとして見せたが、すぐ白い齒を剝きだして、
『さう云はずと、話せ。法衣は着ても、性根は遠藤盛遠、決して、他言はせぬ』
『……』
彌太は、立つて、堤の彼方此方を、見まはしてゐた。頭に物を乘せた大原女が通る。河原の瀨を、市女笠の女が、女の使童に、何やら持たせて、濡れた草履で、舍人町の方へ、上つてゆく。
ほかには、蟬の音と、水のせゝらぎと、そして白い水鳥の影が、氣だるく、淀に居眠つてゐるだけである。
『盛遠』
坐り直すと、
『わしの名は、文覺。盛遠は、十年も前に捨てた名まへ、文覺と呼んでくれい』
『つい、口癖が出てならぬ。――ならば序に、俺の變名も、おぼえておいて、もらはうか』
『ほ。名を變へたか』
『旅商人が、堀井彌太では、をかしからう。――一年に一度づつ京都へ顧客廻りに來る、奥州者の砂金賣り吉次とは、實は、この彌太の、ふたつ名前だ』
『え。吉次』
『さう聞いたら、何か、思ひ出しはせぬか』
『思ひ出した。……おぬし、鞍馬の遮那王樣へ、密かに、近づいて居るな』

五

鞍馬の遮那王。
ずばと、さう云つたのである。
この金的は、よも外れてはゐまい――と云ふやうに、自信をもつた眸で、文覺は、ぢいつと、相手の顔いろを見る。
『……うむ』
堀井彌太の砂金賣り吉次は、笑靨をたゝへて、頷いた。
ふとい――大きな息で、
『……さうか』
文覺も、うなづき返した。
遮那王といへば、源家の嫡男、前左馬頭義朝の末子で、幼な名を、牛若といつた御曹子のことだ。常磐とよぶ母の乳ぶさから摘ぎ離されて、鞍馬寺へ追ひ上げられてから、もう、十年の餘になる。
『……』
文覺は、默つて、指を繰つてゐた。彌太の吉次も、默然と、大文字山の雲を見てゐた。
『今年は、承安三年だな』
『左樣――』
『すると、遮那王樣には、お幾歳になられるか』

『十五歳』
吉次が、答へると、
『ほ……。はやいものぢや。もう、あの乳くさい源家の和子が、お十五にも相成つたか』
『文覺、おぬしも稀には、お會ひなさるか』
『いや、一昨年、書寫山に詣でた折、東光房の阿闍梨を訪ねて、その折、給仕に出た稚子が、後で、それと聞かされて、勿體ない茶を喫んだわと、涙がこぼれた。――噂によれば、僧正ヶ谷や、貴船の里人共も、もてあましてゐる暴れン坊とか』
『さればさ、寺でも、困つてをるらしい』
『その困り者へ、眼をつけて、はる〳〵奥州路から年ごとの鞍馬詣では……。はゝあ、讀めた』
小膝を打つて、
『――奥州平泉の豪族が、奢り振舞ふ平氏の世を憎んで、やがて源家へ加擔の下地でなくて何であらう。これは、世の中が、ちと面白くなりさうだの』
それには答へないで、
『おや』
吉次は、空を仰向いた。
ポツ、と雨が顔にあたる。
加茂の水には、小さな波紋へ、波紋が、無數に重なつた。東山連峰の肩が、墨の虹を吐き流すと、蒼空は、見るまに狹められて、平宗の都の辻々や、橋や、柳樹や、石を載せた民家の屋根が、暮色のやうな薄暗い底に澱んでゆく。
『ひと雨來るな』
文覺も、立ち上つて、
『彌太。――いや奥州の吉次殿、して、宿は』
『いつも、あてなしぢや。塒を定めぬ方が、渡り鳥には、無事でもあるし……』
『高雄の神護寺へ參らぬか』
『いや、さし當つて、日野の里まで參らねばならぬ』
『日野へ。何しに？』
『遮那王樣のお從姉が居らせられて、いつも、鞍馬へのお言傳てを聞いてゆくのだ』
『はて、誰だらう？』
『また、會はう。――そのうちに』
『うむ、氣をつけて行くがいゝぞ』
『おぬしこそ』
二人は、別れ〳〵に、駈けだした。楊柳の並木が、白い雨に打ち叩かれて、大きく搖れてゐる中を。

六

『雨は、やんだかよ』
『やんだらしいぞ』
何處かで、誰か、つぶやいた。
兵燹で、半燒けになつた儘、建ち腐れになつてゐる巨きな伽藍である。そこの山門へ駈けこんで雨宿りをしてゐた砂金賣り吉次は、そつと首を出してみた。
町は、もう、たそがれてゐる。
濡れた屋根の石が、夕星の光に魚みたいに蒼く光る。どこかで、ぱち〳〵と火のハゼる音がするのだつた。赤い火光が、山門の裏から映して來る。
そこから、がや〳〵と、
『阿女、何を、美味さうに、さつきから、ぴちやぴちやと、嘗つてゐるだ、俺にも、分前をよこせ』
『嫌だよう』
『吝ッたれめ、よこさぬか』
『鶏の骨だに、分けやうがないだよ。なあ、菰僧さん』
『鶏を盜んで來て、この阿女め一人で腹を肥してくさる』
『その、味噌餅くれゝば、鶏の片股をくれてやるだ』
『ふざけるな』
『だつて、おら、子持ちだから、他人よりは、腹が空くのは、當りめえだに。……あれつ、嫌だつていふに、傀儡師さんよ、その、鶏の骨、奪り返してくんな』
餓鬼のやうに何か爭つてゐるのである。覗いてみると、女のお菰だの、業病の乞食だの、尺八を持つた骸骨みたいな菰僧だの、傀儡師だの、年老いた顏に白いものを塗つてゐる辻君だの、何して喰べ何しに生きてゐるのやら分らない浮浪人の徒が、仁王の居ない仁王門の一廓を領して、火を焚いたり着物を干したり、寢そべつたり、物を食つたり、宛として、

一つの餓飢國を作つてゐる。

院の御所とか、六波羅の館とかまた平家の門葉の第宅には、夜となれば月、晝となれば花や紅葉、催馬樂の管絃の音に、美酒と、戀歌の女性が、平安の夢を趁つて、戰と戰との、一瞬の間を、あわたゞしく、享樂してゐるのであつたが、一皮剝いた京洛の内部には、かうした、飢ゑと飢ゑとの寄り合ひ家族と、家なき浮浪人が、空寺、神社、辻堂、石垣、およそ屋根と壁の形さへあれば——そして住む主さへゐなければ——巢を作つて、蟲螻の如く、獸の如く、生きてゐた。

（噂より、ひどい）

吉次は、異臭に、顏をひそめながら、衝たれて、見てゐた。

（——五穀にも、風土にも、また唐土の文化にも惠まれぬ奧州でさへ、こんな圖はない）

憮然として、吉次は、見てゐた。まざ〳〵と、惡政の皮膚病がこゝにも腫を出してゐるのである。平家の門閥が、民を顧みる暇もなく、民の衣食を奪つて、享樂の油に燃し、自己の榮耀にのみ汲々としてゐる實相が、こゝに立てば、眼にもわかる。

（これでいゝのか）

天に問ひたい氣がした。

（どうかしなければならない。——神の力でも、佛の力でも駄目だ、兵燹は、神をも、佛をも、燒いてしまつたではないか。——人の世を正しく統べるものは、人の力だ、眞實の人間だ。ほんたうの人間こそ、今の時世に、待たれるものだ）

さう考へて、彼は、鞍馬の遮那王に近づきつゝある自身の使命に重大な任務と、張合を感じた。

『やいつ、誰だ』

すると、一人の乞食が、彼を見つけて、咎めた。

七

去りかけるとまた、

『やいつ、何だ汝やあ？』

傀儡師だの、孤僧だのが、起つて來さうにしたので、

『へい』

吉次は、戻つて、

『雨宿りをしてゐた旅人でございます』

『旅鴉か』

『やみましたから、出かけたいと思ひますが、日野の里へは、まだ、だいぶございませうか』

『日野なら、近いが、日野のどこへ行くのだ』

『藤原有範樣のお館まで。はい、使に參りますので』

『あ、あのお慈悲ぶかい吉光御前樣のお住居だよ』

頓狂な聲をして、女のお孤が立つた。

すると、浮浪たちも、にはかに丁寧になつて、

『吉光御前樣のところへ行かつしやるなら、誰か、案内してあげやい』

『おらが行かう』

竹の棒切を持つた河童みたいな小僧が、吉次の側へ寄つて來て、

『旅人、案内しよう』

『すまないな』

『なあに、吉光御前樣には、おらたち、どれほど救はれてゐるかしれないのだ。あのお館は、さう云つちや惡いが、落魄れ藤家の、貧乏公卿で、御全盛の平家とちがひ、築土の崩れも修築へぬくらゐだが、それでゐて、俺たちが、お臺所へ物乞ひに行つても、嫌な顏をなされたことはない……』

一人が云ふと、女のお孤も、

『多が來れば、寒からうとて、わし等ばかりでなく、東寺や、八坂の床下に棲む子等にまで、古いお着物は惠んで下さるしの』

口をそろへて、その他の浮浪たちも云ふのであつた。

『化粧に浮身を窶すおしやれ女や、身の安樂ばかり考へてゐる慾ばり女は、お館といふ嚴めしい築土の中にうんと居るが、あんなやさしい女性が、今の世のどこに居るかよ。——あのお方こそ、ほんたうの、觀世音菩薩といふものだらう』

『さういへば、如意輪觀世音が御信仰で、月ごとに、御參詣に見えておいでだが、この春ごろからお姿を見たことがない。——もし

や、お病褥ではないかと、わしらは、案じてゐるのぢや』

鷄の骨を嘗りながら、女のお孤は、さう云つて、山門の外まで、送つて來る。

吉次は、心のうちで、うれしかつた。その吉光御前といふお方こそ、自分が、主命をうけて、機會さへあれば世に出さうと苦心してゐる鞍馬の稚子遮那王の從姉にあたる人なのであつた。

『水溜りがあるぜ、小父さん』

河童は、竹の棒で、眞つ暗な地をたゝいて、先に歩いてゆく。

鼻を抓まれてもわからない小路の闇に、野良犬が、吠えぬいてゐる。犬すら、飢ゑてゐるやうに、しやがれ聲に聞えた。

小川がある、土橋を越える。やゝ廣い草原をよぎると、河童は、竹の先つぽで、

『あそこに、大銀杏が見えるだらう』

と、指して云つた。

『……あの銀杏の側の土塀が、正親町樣だよ。藤原有範樣のお館は、あそこを曲がると、すぐさ』

『や、ありがと』

道をすゝんで、二人は目じるしの大銀杏を横に曲がりかけた。すると河童は、何かに、驚いたやうに、

『おやつ？』

と、立ち竦んでしまつた。

『なんだ……、なんだらう……あれは？』

河童は、眼を大きくした儘、怯えたやうに、さうつぶやいた。

『あ――』

吉次も、その前に、足をとめてゐたのだつた。

二人とも、呼吸をのんだ。

そこの大銀杏から小半町先の一廓ひに、館構へが見え、古びた殿作りの屋根が、墨で刷いたやうに、赤松の梢と、築土の蔭に、沈んでゐる。

それはいゝ。

それはさつき河童がいつた有範朝臣の館にちがひないのである。然し、二人は、そのほかに、異なものを見たのであつた。

異なものといふのは、そこを曲がつた途端に、眼を射た光である。およそ、夜といへば、光に乏しい世界に住んでゐる人間にとつて、光ほど、尊く、有難く、また、妖しく考へられるものはなかつた。

その光だつた。

白い虹といはうか、彗星の尾のやうな光が、有範朝臣の屋の棟とおぼしい邊りから耀耀と映して、二人が、

（あつ？）

と云つた間に、眼を拭つてみれば、何ごとにも思へない元の闇なのであつた。

『見たか、お前も』

『見た』

と、答へて、河童は急に、

『小父さん、おら、こゝで歸るよ』

尻ごみをした。

『ご苦勞だつた』

吉次は、錢を與へて、

『――今の光ものを、お前は、何だと思ふ！』

『わかんない』

『俺にもわからぬ。ふしぎなこともあるものだ』

『皆んなに、話してやらう』

『こら〳〵、うくわつな事を、言ひ觸らしてはいけないぞ』

『あゝ！』

河童は、鴉みたいな返辭を投げて、一目散に、もとの道へ、駈けて行つた。

砂金賣りの吉次は、築土の外に立つた。どこを眺めても、盲目のやうに門が閉まつてゐる。雜草が、殆ど、門の腰を埋めてゐるのである。野良犬ならば、すぐ跳び越えられるやうに、崩れてゐる所もある。蔓の絡んでゐる椋の樹の上で、キチ〳〵と、栗鼠が啼いた。

『變遷るなあ……世の中は』

沁々と、彼は、思ふ。

藤原氏の一門といへば、人間の爲しうる豪華な生活圖を地上に描き盡したものである。それが、武家同士の興亡となり、武家政治となり、今の平家の全盛になつてからは『落魄

れ藤家』と嘲けられて、面影もない存在になつてしまつた。狐狸でも住みさうな、この古館のしいんとしてゐることはどうだ。灯の氣も見えぬし、犬すらもこゝには居ないとみえる。

とん、とん、とん……

試みに、裏門とおぼしい所を、吉次は、そつと叩いてみた。

そして、低聲で、

『こん晩は――』

何度か、訪れてみた。

『駄目だ』

考へてゐたが、やがて、小石をひろつて、侍部屋らしい屋根を目あてに、投げつけた。

蔀を上げる音がした。――間もなく、壺のうちで、灯りが搖らぐ、そして、木履の音が、カタ、カタ、と近づいて來た。

九

『誰ぢや』

姿は見えない。

門をへだてゝ、中にゐる侍が訊ねた。

『砂金賣の吉次と申しまする。お館樣か、御奥の方に、左樣、おつたへ下されば、おわかりでございまする』

『吉次？』

考へてゐるらしい。

雨あがりの草叢に、蟲が啼きぬれてゐる。吉次はまた、ことばを足して、

『――奥州の堀井彌太と仰つしやつてくだされば、なほよくお分りのはずでございます。かねゞゝ、御書狀をもちまして』

云ひかけると、ガタンと、門の扉がうごいて、

『秀衡殿のお身内人、堀井殿か』

『いかにも』

『それは、失禮を――』

すぐ開けて、

『拙者はいつも、おん奥の御代筆を申し上げ、また、そちらよりの御書面にも、拙者の宛名で御狀をいたゞいてをる、當家の家來、侍從介でござる』

と二十歳ぐらゐな若侍が顏を出した。

『や、其許が』

『初めて、御意を――』

二人は、舊知のやうに、あいさつを交した。

『おん奥の方には、先つ頃、上洛りました節、清水の御堂のほとりで、よそながらお姿を拜したことがございますが、お館には、今宵が初めて』

『よう御座つた、まづ』

と、内に入れて侍從介は、門を閉めた。

壺の内も外も、境のないほど、秋葉が生ひしげつてゐる。まだ、萩に早く、桔梗も咲かぬが、雨後の夜氣は、仲秋のやうに冷々と感じる。

召使も、極めて少いらしい。侍部屋へ通されて、吉次は、畏まつてゐたが、燭を運ぶのも、茶を煮てくるのも、みな侍從介だつた。然し、こゝに入つてから感じたことは、外から見た樣子とはちがつて、なにか、藹々とした和かな家庭味とでもいふものが、さすがに教養の高い藤原氏の住居らしく、身をくるんでくれることだつた。あら削りな武人の家庭や、でなければ、浮浪の餓鬼の生活にしか接してない吉次には、

（やはり、ゆかしいものがある……）

と、そこらの調度や、どこかで薰らしてゐる香木のかをりにも、さう思へた。

『失禮いたした』

侍從介は、座に着いて、

『實は、ちと、お館におとり混みがござるので』

『ほ』

吉次は、途中で耳にした噂を想ひだして、

『どなたか、御病人でも』

『なんの』

と、笑つた。

その侍從介の顏の明るさに、彼は、むしろ意外な氣持がした。

『およろこびごとでござる。――この春、承安の三年彌生の朔日、珠のやうなお子樣がお生れ遊ばしたのでござる。それがため御當家は百年の春が回つたやうに、お館樣も、おん奥の方も、御一門の若狹守樣も、宗業樣も、朝に夜に、お越しなされて、あのとほり、奥でのお團欒。折から今宵は、お喰べ初めとや

ら、お内輪の祝ひでな』

吉次は、さう聞くと、とたんに、こゝへ來る前に見た、屋の棟の光りを想ひだしてゐた。

十

『で……お目通りは成りかねるが、貴所の來られたこと、お取次ぎはしておいた』

侍從介は、さう云つた。

然し、吉次の用件よりは、彼自身、一緒になつて、主家の慶事にほく〳〵してゐて、すぐ、その方に、話題をもどすのだつた。

お子は、いと健やかで、貴相氣高く、珠のやうな男子であること。

また、おん名は、母御前の君が、胎養のうちに、五葉の松を夢見られたといふので、十八公麿君と名づけられたといふこと。

また、十二ヶ月も、御胎内にあつたといふこと。

それから——

母の吉光御前が、なみならぬ御信仰であつたせゐか、御入胎のまへに、如意輪觀世音のお夢をみられたり、そのほかにも、いろ〳〵な奇瑞があつたといふこと。

そしてまた。

さる聖が、わざ〳〵訪ねて來て云ふやうには、今年は、釋尊滅後二千一百二十二年にあたる、或は、靈夢やもしれぬ。松は十八公と書く、彌陀正因本願の數につうじる。この嬰兒こそ、西方彌陀如來のご化身ぞとおもうて、よく〳〵慈しまれたがよい——と、母體の君の枕べを、數珠をもんで伏し拜んで去つたといふこと。

彼の話は盡きない。

吉次も、耳よりな話と、心にとめて、聞いてゐた。

鞍馬の御曹子に告げたらば、さだめし、一人の源家の味方が殖えたと、力づよくも思はれよう。すると、奥まつた東の屋で、

『侍從介』

と、誰やらが呼ぶ。

『はい』

會釋して、彼は、立つて行つた。

この次、遮那王に會ふ時には、ちと、渡して欲しい物がある故、立ちよつてもらひたい——と、かねて、吉光御前からの書面の約束で、吉次は、來たのであつた。

（お從弟へ、渡してくれとは、一體、何かな）

吉次は、しびれた足を、少しくづして、待つてゐた。

そして、吉光御前の、初產の美を、そつと、瞼で想像した。

一、二度、清水のあたりで、姿はよそながら見たことがある。まだ、年もお若い筈だ。人妻でこそあるが、まことに、清純な麗人でおはした印象が今もふかい。氣品においては、源家の正統、鎭守府將軍義家の嫡男、對馬守義親の息女、云ひ分のあらうわけはない。

同じ、義家將軍を祖父として、源義朝は、いふまでもなく、彼女の從兄にあたるが、その義朝こそは、平相國清盛の憎惡そのものであつた。

幸といはうか、不幸といはうか、彼女は、見るかげもない不遇な藤家に、十五の年から嫁づいてゐたので、正しく相國の仇敵義朝の從妹ではあつたが、清盛の眼には、そのために、無視されて、無事の中に暮して來られたのであつた。

無視の中から、十八公麿は生れた。——後の親鸞聖人である。

もし。

彼女の良人である有範朝臣が、時めく才人であるか、政權をめぐる時人であつたならば、十八公麿は、生れてゐなかつたかも知れない。

なぜならば——その前に、吉光御前の血統は六波羅の忌むところとなつて、義朝の子たちである——頼朝や遮那王（義經）のやうな嚴しい追放をうけないまでも、何等かの監視と、束縛に、家庭は呪はれずに居なかつたに違ひないからである。

『や。お待たせした』

侍從介は、やがて何やら、小筥を持つて入つて來た。

十一

『これを、鞍馬の遮那王樣へ、さし上げてく